《調査と資料》

朝鮮通信使史跡探索(二)

中川浩一

山口県南東部に位置し、南北方向に約十五キロ突出する室津半島の南西部と向い合う長島にはさまれた水面が、上関港を構成する。赤間関から大坂に向う瀬戸内海航路の最短経路上に位置し、中世には倭寇や村上水軍の根拠地となった。室町時代には、大内氏による大陸貿易の拠点ともなった。この様な史実を背景として、熊毛郡上関町が発行する観光パンフレットが、この地を海のシルクロードの要(かなめ)とみたてるのも、むべなるかなである。江戸時代には、西廻海運の興隆によって、上関の地位はいよいよ高まった。半島と長島にはさまれた水面は風波を避けるのに適し、風待港として機能した。上関の名称は、関門海峡を厄する下関に対し、京に近い位置にもとづく由である。注5

上関での朝鮮通信使接待は、長州藩の担当であった。この地は、交通の要衝に当たり、参勤交代の九州諸大名も通過することから、迎賓館としての「御茶屋」が設けられたほか、港の警備、見張りのほか、通過貨物を扱う越荷会所の検査、税金徴収など、多角的に機能する「御番所」も存在した。

「御番所」は、最初は長島南西端の四代に設けられたが、正徳元年(一七一一年)に上関へ移された。注6

離島であった長島は、昭和四十六(一九七一)年に最大径間一四〇メートル(橋長二二〇メートル)のコンクリート・アーチ橋で室津半島と結ばれて今日に至っている。JRの最寄駅は山陽本線柳井で、ここから長島字福浦まで、防長バスの便がある。バスの通る道路は、室津半島の西岸に沿って走り、半島南東岸には陸上の公共交通手段がないためか、釜山から対馬までは、六隻に分乗して到着した朝鮮通信使の一行も、城下町を控えた厳原港から江戸への旅に出立するときは、藩主に率いられて同行する対馬藩の要員八百名あまりが加わって、大船団をなしたという。注1

対馬海峡東水道を渡っての壱岐では、北端の港勝本(往時は風本浦)にたちより、壱岐水道を横切って着く処は、玄海灘の小島相ノ島(往時は藍島)である。この地では、福岡藩が接待に従事した。

相ノ島は、福岡県粕屋郡新宮町に属する離島で、新宮港から約8キロ沖に位置し、面積一・二五平方キロ、地形は標高五〇〜七〇メートルの台地状をなしている。古代から交通の要衝として知られ、『日本書紀』『万葉集』にも記された由で、この地に福岡藩が朝鮮通信使接待の客館を設けたのも、それなりの理由があったといえるだろう。注2

藍島での接待は大がかりで、正徳元年(一七一一年)の第八次通信使の到着に際しては、一行四七九名に対馬藩の要員を加えた大人数を、一週間にわたって歓待した。福岡藩が用意した船は五百隻あまりで、約三千六百名の水夫が動員されたと記されている。注3

次の寄港地は、瀬戸内海への出入口となる関門海峡本州岸の赤間関(現・下関)で、使館には、阿弥陀寺があてられた。注4

海のシルクロード上関

瀬戸内海に入って最初に船団が寄港するのは、上関(かみのせき)である。

写真①　「上関御番所」から見た上関港
(1997年9月写)

写真②　西側から見た上関大橋と上関海峡
(1997年9月写)

ＪＲ柳井港との間に、一日二往復の定期航路が設定されている。町域を同じくする周防灘の小島である祝島、八島へも定期船が設定される。

上関への陸路をたどる

上関が朝鮮通信使にゆかりの地である事実は、多くの文献に記されるが、有形の史跡が存在する事実は、平成六（一九九四）年に青丘文化ホール（大阪市）が主催した「ネットワーク朝鮮通信使展」の解説冊子を介して確認した。掲載した江戸への旅地図の注記が、山口県上関町超専寺と記していたからである。

ＪＲ柳井駅で乗車した防長バスは、道を南西にとって熊毛郡平生（ひらお）町域に入りこむ。中心集落で町役場のある平生町からは、登校する高校生たちが乗ってきた。室津半島北西端には、百済部（くたなべ）と名乗る集落がある。渡来人とのかかわりがあるのだろうか。ここから山裾でかつ海岸沿いの道は南東に方向を転じ、沖に馬島、佐合島の有人小離島をみて走ると旧佐賀村に入る。平生町は、昭和三十（一九五五）年に三村を合併して町域を拡張した。注7

五十分ほど走ると半島南西端の集落室津に着く。南北方向に延びた幅五〇〇メートルから一キロほどの水面が上関港だが、上関を名乗るのは長島側の集落で、半島側は室津である。

半島最尖端と長島東岸の間で海峡は幅一〇〇メートルほどに縮まり、両岸の丘陵を結んで上関大橋が架っている。橋を渡った処にバス停があり、ここで高校生たちが下車する。熊毛南高校上関分校があるからだが、隣町から乗車して分校に三十分をこえるバス通学するのは、偏差値による輪切りの結果だろう。

バス停に接して「海のシルクロード上関」と大書した観光案内地図の表示があり、上関を訪れた主な人物の似顔絵を配するが、豊臣秀吉と朝鮮通信使が同居するのは、歴史の皮肉である。

二万五千分の一地形図「室津」図幅によると、町役場は長島字上関にあるけれど、上関ゆきと方向幕に掲示したバスは上関を通り抜けて、福浦を終着にした。

復元した「御番所」に史料を展示

二万五千分の一地形図では、上関にも寺院の記号が二つあってどちらが超専寺か判らない。それゆえ、最初に町役場を訪ね、観光パンフレットを手にいれてから超専寺の位置を訪ね、さらにこのほかにも朝鮮通信使にかかわる史跡の有無を質したら、詳しい人がいますからと引き合せて下さったのが、総合企画課企画係長の井上敬二さんであった。「かみのせき郷土史学習にんじゃ隊」のリーダーでもあり、古文書解読に努められてきた由である。

もうひとつお見せできるものがありますから案内しますといわれて、つれていかれたのが、復元移築された「上関御番所」であった。その途中にある阿弥陀寺も、通信使一行の宿舎にあてられたという。

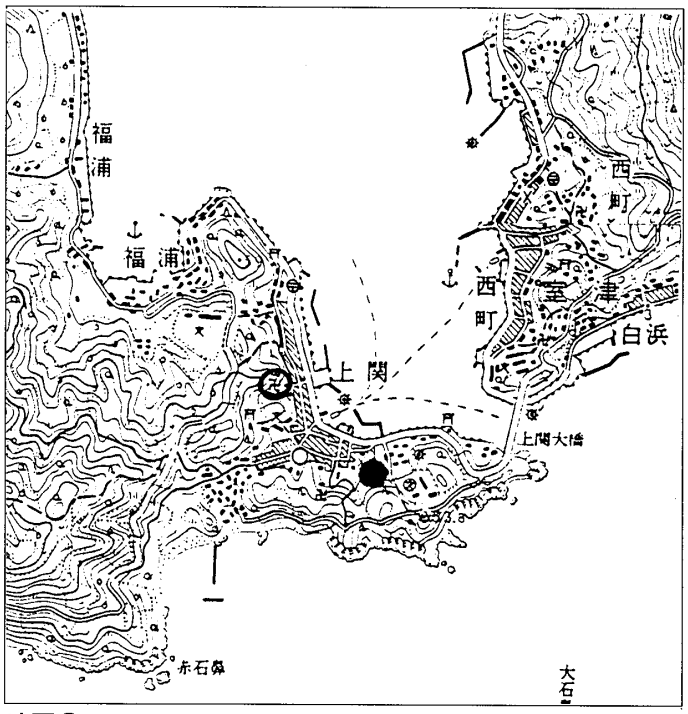
御番所の建物は海岸沿いの平地に建っていたのだが、老朽化して取りこわされる直前に町がひきとり、高台に移築して公開したとのことである。その位置では上関港の見晴しもよく、適切な措置であったといえるだろう。

復元された御番所の床の間には、超専寺が所蔵する「通信使上関来航図」がカラー写真パネルに仕立てられて掲示されている。注8絵柄は桟橋に着岸して、通信使首脳部（三使）を迎賓館としての「御茶屋」に案内する直前の情景を示している。「御茶屋」の間取り図もカラー写真パネルになり展示されており、これにもとづく模型作製が進められつつあるという。

「御茶屋」の位置は上関分校の敷地部分だが、往時の石垣が残るだけである。移築された副門（さるとり門）が、超専寺山門になっていると、町役場発行のコミックには記されるが、現地に表示がないのは惜まれる。

上関町は、朝鮮通信使にかかわる史実を、町民に広く認識してもらうために、Ｂ５版九十九ページにもなるカラー印刷の劇画絵本『海と時を越えて――コミック朝鮮通信使物語』を平成九年三月に刊行している。この冊子も頂いたが、非売品であった。

写真③　移築し復元された「上関御番所」
屋内にカラー写真パネルによる展示がある
(1997年９月写)



地図①
(上関)　1：25,000「水場」「室津」(平成３年修正)
●が「上関御番所」
㊍が超専寺

下蒲刈島への道を案ずる

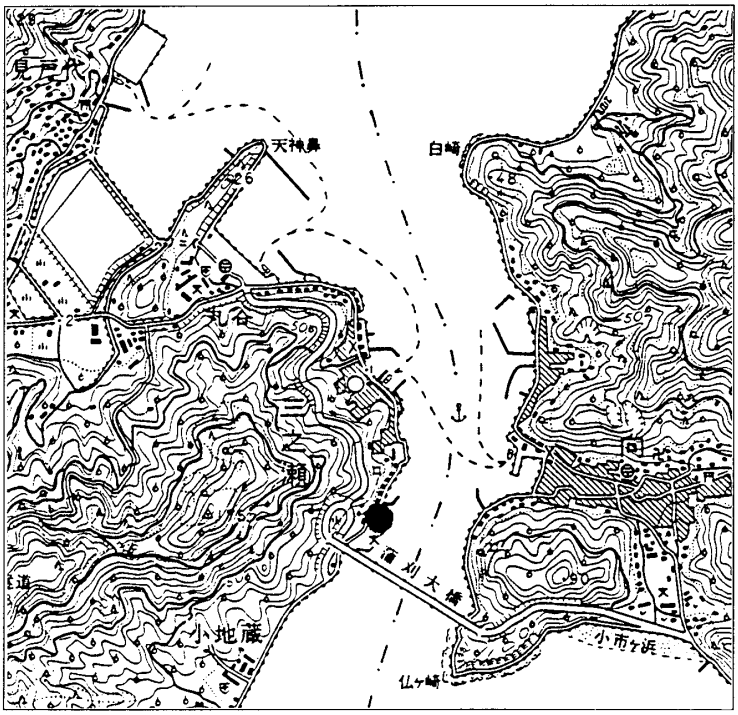
周防灘を抜けて安芸灘に入ってから寄港した鎌刈(かまがり)(現・下蒲刈)については、資料がそれなりに整っているというべきだろう。上田正昭編『朝鮮通信使――善隣と友好のみのり』(一九九五年、明石書店)は、一九九三年に開催した高麗美術館講座での講演をまとめた成果だが、「朝鮮通信使と下蒲刈島での接待」も収められている。演者は、郷土史家の柴村敬次郎氏(下蒲刈郵便局長)で、『朝鮮通信使と蒲刈』(昭和五十二年)下蒲刈町教育委員会の著作もある。

下蒲刈町が朝鮮通信使にかかわる史実を積極的に発掘しようと努力してきたことは、「朝日」一九九二・二・二三付の特集記事「友好の二六〇年、今また脚光――朝鮮通信使」が、厳原町、福山市(広島県)、牛窓町(岡山県)と併記して具体的に報道した。朝鮮通信使資料館(仮称)が、

牛窓町の「町立朝鮮通信使資料館」（一九八八年開設）に続いてオープン予定とも報じてきた。

下蒲刈町が、呉市域の南東部に隣する事実は、地図で読みとれる。けれども『ＪＴＢ時刻表』ではＪＲに接する定期船発着港が判らない。『平凡社版日本地図帳』（一九九一年）によると、ＪＲ呉線仁方駅が最寄と判断できるので、とにかく出向いてみた。ここは、国鉄仁堀航路が、昭和二十一年五月一日から昭和五十八年三月三十一日まで開設されていた処でもある。

ＪＲ仁方駅の本屋は山側に位置し、改札口をでてから歩道橋で線路を越え、バス道路に沿って東へ十分近く歩いた処に、仁方港の旅客施設が存在した。ここから安芸汽船の経営するフェリーが、下蒲刈島、上蒲刈島へ通じている。観光案内板から朝鮮通信使資料館は、下蒲刈島三之瀬



地図②（下蒲刈）　1：25,000「仁方」（平成４年修正）
●が「御馳走一番館」
○が下蒲刈町役場（雁木が保存）

写真④　下蒲刈島三之瀬港に残る「長雁木」
（1997年９月写）

に位置する事実が読みとれる。

広場には、仁堀航路の閉航記念碑が建てられていた。

上陸乗船施設の「雁木」が残る

下蒲刈島と上蒲刈島は、南北方向で幅三〜四〇〇メートルの狭い水道によって隔てられ、最狭部には船の通航に支障のないだけの桁下空間をとって蒲刈大橋が架けられている。下蒲刈島と呉市域を結ぶ長大吊橋の「本土架橋」工事も進んでおり、離島からの脱却も時間の問題だろう。

仁方からのフェリーは、まず下蒲刈島の見戸代港に着岸し、次には上蒲刈島向浦港に入り、帰途に三之瀬港を経由する。朝鮮通信使史跡は三之瀬に集っているから、見戸代港で下船するのは、賢明な策ではない。

三之瀬には広島藩支配当時、海岸に接して本陣が置かれてきた。海の街道に見立てられた下蒲刈島には、参勤交代の西国大名を始め、朝鮮通信使、琉球王国使節、江戸参礼の和蘭商館長の立寄りが記録されてきた。

潮の干満に差の多い瀬戸内海での海況に備えて、海面がどの高さにあっても、上陸、乗船に支障をきたさない様に、石積階段で構成する「長雁木」と呼ばれる施設が、波打際に造られ、現存している。

現地の説明表示は、次の通りである。

長雁木（なががんぎ）

下蒲刈町三之瀬三一三—六番地地先

江戸時代（一六〇〇年代）本陣の一環として作られたもので、福島正則が幕命によって作ったところから別名福島雁木ともいわれております。

参勤交代をする西国大名をはじめ、琉球、朝鮮、オランダの使節も、江戸等への往路、復路とも蒲刈島に立寄り、この長雁木から上陸しておりました。

作られた当時は長さ約一一三m、一一段であったといわれておりますが、現在は長さ約五五・五m、一四段となっております。

一九九七年九月十七日に訪問当時、石段は十四段全てが露出し、水面がなお低い位置にあったのは、地盤隆起の影響かもしれない。

史跡指定の本陣跡地

長雁木と道路を距てた位置に下蒲刈町役場があり、「三ノ瀬御本陣跡」と縦書きした石の標柱が建っている。かたわらに石造の標示板がおかれ、「下蒲刈町の県史跡　昭和15年2月23日指定」としたうえで、蒲刈島御番所跡、三之瀬御本陣跡、三之瀬朝鮮通信使宿所跡の三か所があげられている。

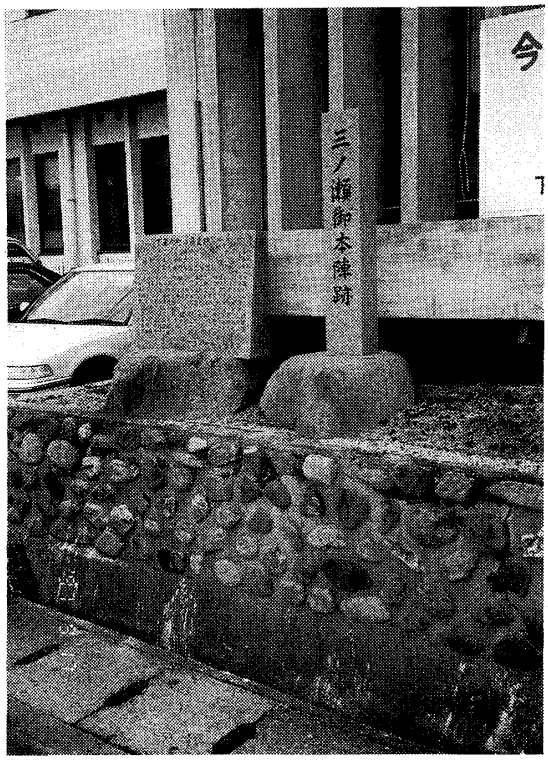
説明文は、長雁木のものと重複する部分もあるが、次の様に記される。

蒲刈は古くから内海航路の要衝で、船泊りとして栄えた。福島正則は幕命により、三之瀬に海駅を設け、長雁木を築いたという。江戸時代浅野藩は、ここを公の繋船場として、番所や本陣や上下の御茶屋を常備した。番所には繋船奉行のもとに定数の船頭、水主が常備され、番船や水船などがいつもつながれて、海上の守りについた。本陣は港に接する浜本陣の形態を整えて諸大名の宿泊に利用された。上下の御茶屋は朝鮮通信使の来朝、琉球使節の参府、オランダ人の江戸参礼の際、宿泊接待所に当てられた。

下蒲刈町教育委員会

『朝鮮通信使と蒲刈』によれば、〝信使来朝の停止後は、まもなく御茶屋はこわされたとみえ、文化年間には、屋敷跡の石がきを残すばかりとなった。今日、上の茶屋に達する折れまがりの路地と石段が残るのみである〟とされている。

三之瀬港で上陸すると、右に曲ってすぐの処に本陣跡があり、左に曲って一〜二分で番所跡に着く。公園風に整備された一角に、「蒲刈島御番所跡」の標柱を配して、復元されたと思われる石造の「常夜灯」が建てられている。本陣跡と御番所跡の間には、豪荘な日本家屋の「蘭島閣美術館」が山側にあり、次に海側にこれも日本家屋の「御馳走一番館」が



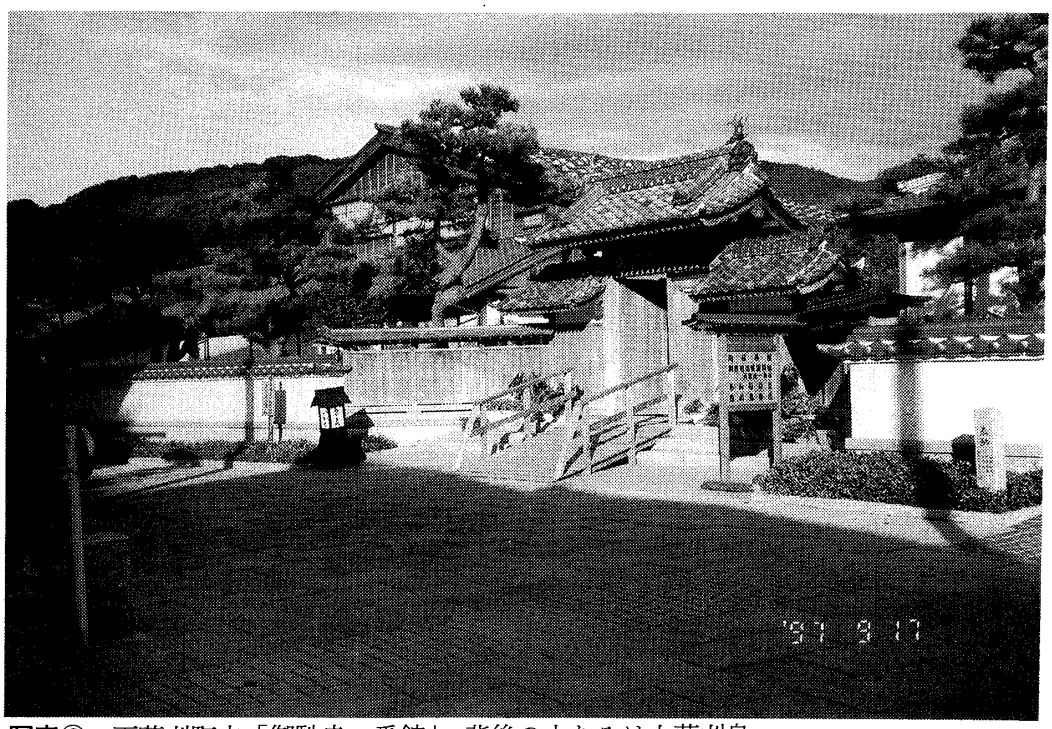
写真⑤　町役場庁舎前に建つ「三ノ瀬御本陣跡」の標柱(1997年9月写)

あって、隣り合わせに町立下蒲刈小学校が建ち、家並みはここで終りとなる。

充実した展示の「御馳走一番館」

「御馳走一番館」は、下蒲刈町立朝鮮通信使資料館であるが、当初は料亭にみえて、博物館とは気付かなかった。展示解説の図録に収められた下蒲刈町長の文によると、展示館とした建物は、〝日本海を経て朝鮮文化の影響を数多く受けたであろう富山県砺波地方の代表的な商家造である「有川邸」を移築整備〟した由である。同じ敷地内に山口県上関町から移築した「大庄屋」吉田家の平入り入舟屋型本瓦葺き屋根の土蔵造りが、世界の灯火器を集めた「旧吉田邸あかりの館」として設けられている。この豪荘な屋敷も、朝鮮通信使の通行を見送ったことだろう。

朝鮮通信使資料館を「御馳走一番館」と名付けた由来は、正徳元年(一七一一)に来日した第八次通信使一行に対し、公儀より各地の御馳走(接



写真⑥　下蒲刈町立「御馳走一番館」，背後の山なみは上蒲刈島(1997年9月写)

待）についてたずねられたのに対し、一行に同道した対馬藩主宗氏は、〝天和度『安芸蒲刈御馳走一番』と注進〟した故事によっている。またこれまで筆者は、朝鮮通信使にかかわる常設展示を、佐賀県立名護屋城博物館、長崎県立対馬歴史民俗資料館、広島県牛窓町立海遊文化館、兵庫県御津町立室津海駅館、滋賀県近江八幡市立歴史民俗資料館で見学したが、内容が最も充実していたのは「御馳走一番館」であった。

展示図録は、佐賀県立名護屋城博物館も『展示案内』として刊行するが、A4版三十一ページのうち、朝鮮通信使には二ページを割くにすぎない。館の名称からも判る様に豊臣秀吉、とくに文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）が展示主題であるけれども、近代の日帝支配にかかわる展示が薄弱なのも、常設展示の主題を「日本列島と朝鮮半島の交流史」とする博物館としては、致命的な欠点かと思われる。

これに対して「御馳走一番館」の収蔵品目録は、ハングルと英語による解説を日本語と同一比重で配し、展示品に対する解説も詳細で、これまた第一級の出来栄えである。

見栄えする復元模型の展示

「御馳走一番館」を名乗るのだから、通信使の三使（正使、副使、従事官）に供された「七五三の膳」の復元模型がきらびやかに展示されるのは当然であろう。出典は、文化七年（一八一〇年）、翌年来日予定の通信使に備えて作成した『朝鮮人御饗応七五三膳部図』（名古屋市蓬左文庫蔵）であった。注9

本膳に七種、二膳七種、三之膳五種、四ツ目三種、五つ免三種の料理を用意するので、「七五三の膳」と称し、江戸時代最高の供饗料理の由である。しかしこの膳は儀式用で、実際に食したのは「三汁十五菜」で、この復元模型は呉市入船山記念館が所蔵する「延享度朝鮮人来聘記六」（手島家文庫）に記された三使一人前一日分の料理材料にもとづく考証結果と称される。注10

これらの復元模型は「御馳走一番館」のオープンに先だって作られ、町役場二階に展示されていたことが、前に記した「朝日」の記事から明らかになる。

「正徳度蒲刈島御馳走所絵図」を参考にして作成した本陣復元模型も見事な出来栄えであるが、配される行列人形については、蒲刈では隊列を組んで進むということはなかったと考えられると、図録には記されている。

通信使それ自体については、金冠朝服（儀式用）着用の正使、冠服（執務用）着用の副使、便服（普段着）姿の従事官のそれぞれ等身大人形に加えて、正使等が乗船した大船の十分の一模型が展示され、これまた見ごたえのある存在となっている。ソウル大学名誉教授で古代船舶学専攻の金在瑾氏の考証にもとづいて作成された。注11

この船が、釜山と大坂の間を往復したわけだが、長さ三・三七m、幅一・二四m、帆柱先端まで三・〇mの大きな模型である。船団は大船、中船、小船各二隻で構成され、第八次通信使の正使船には、一二七人が乗船したとされている。

各地の朝鮮通信使人形を蒐集

パネルによる展示を介して、釜山出帆から大坂到着、淀川航行、ついで隊列を組んでの江戸への陸行を詳細に示すのも、充分な配慮とうかがえる。それに加えて、「朝鮮通信使人物図」によって、使節団構成員が個々に具体的な絵姿となっているのも興味深い。

異色のコレクションは、各地で作られた朝鮮通信使人形の展示であった。これらのルーツは〝淀川から上陸した通信使一行が、京都をめざして行進する沿道に多くの窯元があり、通信使を摸した土人形が、伏見稲荷大社のみやげものとして爆発的な人気を博した〟ところに存在する。注12それが、全国各地で作られたのは、みやげものにとどまらず、北前船によって遠く東北各地にも運ばれたからであると、図録には記される。

展示される人形の中に、三春張子人形があり、これは福島県三春町の郷土玩具ゆえ、後日に三春へ足を運んでみた。

三春町の市街から四キロ近く離れた山合いに四軒の人形細工師で構成される「民芸の里——高柴デコ屋敷」があり、三百年の伝統が守り続け

られている。注13

案内のパンフレットによると、〝高柴の張子作りは、幕藩体制の安定した元禄時代、でこ屋敷の先祖橋本元右衛門を創始とします。土を用いる京都の伏見人形や仙台の堤人形に対し、和紙を用い日本一といわれる独特の張子人形をこの山間の地で生み出したことは驚異といわれます〟と記されるが、朝鮮通信使の行列通行と全く無縁の地で、朝鮮通信使人形が作られたことも、驚くに値しよう。

このパンフレットに示された「羯鼓」人形も腰に取り付けた鼓をばちでたたくという日本の習慣にはない仕草を伝え、韓国・北朝鮮に伝わるチャンギ演奏に触発された創作かと思われる。

これも展示品の「相良人形」は、静岡県の榛原郡相良町の民芸品ではなく、山形県米沢市での伝統玩具の由である。

注

(1)悦話堂編『韓日交流二千年』(一九八四年)悦話堂・ソウル、八五ページ。
(2)渡辺・中野・山口・式共編『日本地名大辞典』1「九州」(一九七二年)朝倉書店、一ページ。
(3)注(1)に同じ。
(4)阿弥陀寺は、源平壇浦の合戦に際して入水した安徳天皇を葬った由来がある。明治になって廃寺され、明治八(一八七五)年に赤間神宮が設けられた。
(5)谷岡・山口監修『コンサイス地名辞典』日本編(一九七五年)三省堂、三三七ページ。
(6)上関町教育委員会「上関御番所」パンフレットの記述による。
(7)『コンサイス地名辞典』日本編、一〇二〇ページ。
(8)広島県下蒲刈町役場『御馳走一番館——収蔵品図録NO・1』(平成6年)によると、「辛巳仲夏四月竹田生写」の落款があるけれど、辛巳年に通信使来日はなく、年次の特定はできないという。
(9)下蒲刈町『御馳走一番館——収蔵品図録NO・1』(平成六年)四十七ページ。
(10)注(9)に同じ。
(11)注(9)記載本の四十八ページ。
(12)注(9)記載本の五十一ページ。
(13)所在地は郡山市西田町高柴字館野一六三で、三春町域ではない。